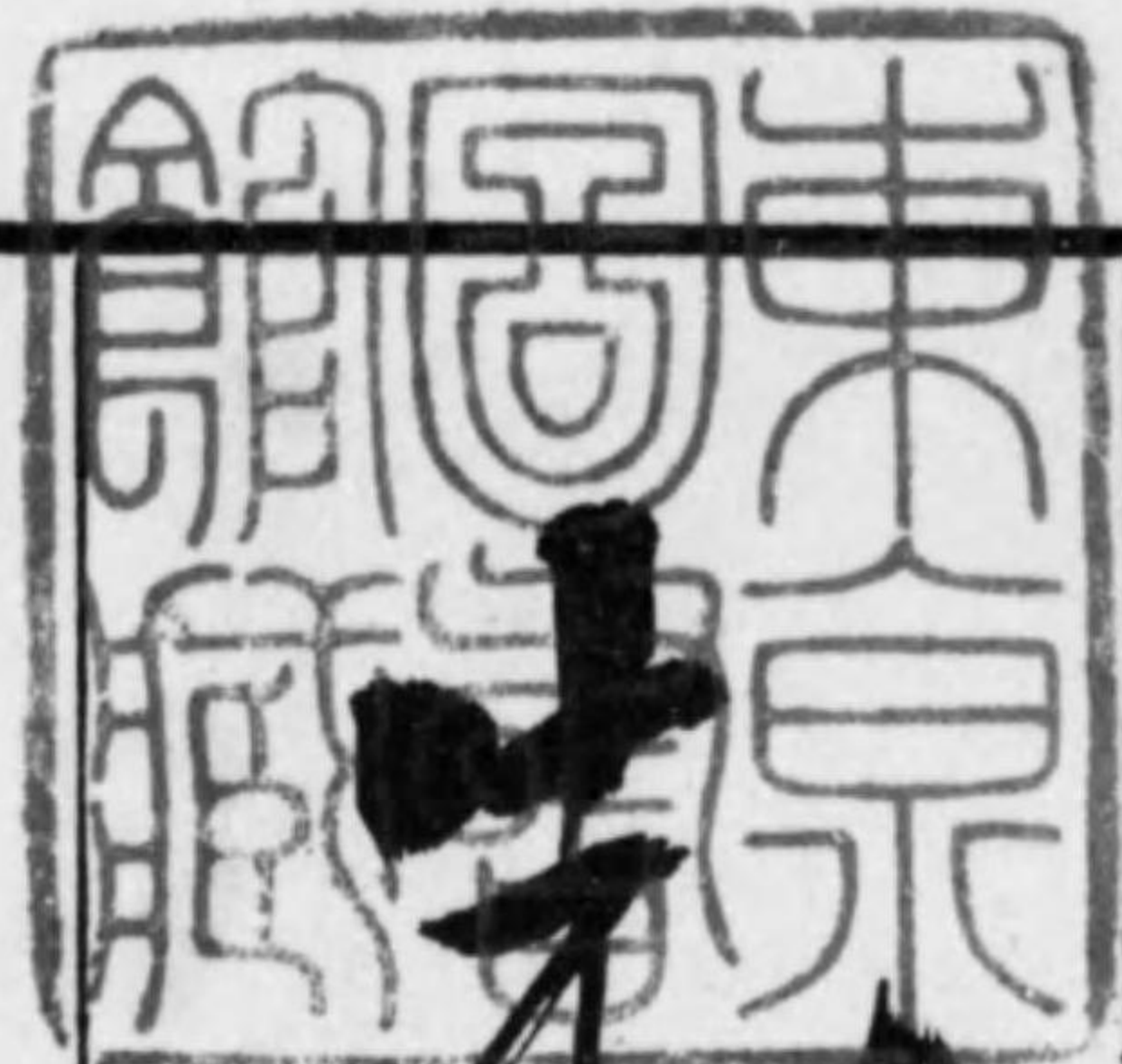


13

特28
770

№786/XXV



先哲系

明治二十五年三月四日



松葉杉亭二漢書

祭先哲諸子靈文

明治二十五年三月四日廣陵處士吳秀三謹以清酌庶羞之奠祭于鷓齋磐水等諸子之靈曰當江戶幕府之時蟹文非不傳然決不易熟通也洋方非不起然未易遽與漢技比功崇也加之國有嚴禁學設樊籠妻孥驚惑術窮道窮也夫事之難為莫甚於不得時也然恢弘其道固無須與世推移也而况昭代之偉業實由諸子開之基也嗟我醫學之有今日無非諸子餘澤也聲名之所及於今猶遠於疆域也懸遺像以致虔祭慕盛風而仰高格也跪而薦酒髣髴未享

杉田ノ諸先生江戸小塚原ニ於テ始メテ觀臟ノ舉アリシニ因ルナリ蓋シ此觀臟ノ舉ハ古來ノ妄説ヲ看
 聊カ以テ景仰ノ微衷ヲ表セント欲ス而シテ我儕カ特ニ此日ヲ撰ヒタルモノハ明和八年三月四日前野
 想スル毎ニ未ダ嘗テ感涙ニ咽ハズンハアラズ今茲三月四日我儕此處ニ相會シテ諸先哲ノ靈ヲ祭リ
 ニ明治ノ聖代ニ生レ其學孫タルノ名譽ヲ辱フス常ニ先哲ヲ思フテ而シテ見ルコト能ハズ其偉業ヲ回
 返精英ノ鍾マレ所ニ後世ニ傳ヘ以テ斯學ノ隆盛ヲ致ス其功德タルヤ遠クシテ且至大ナリ我儕幸
 學問ニ新人皆奮フテ遠西ノ學術ヲ講ス洵ニ人事ノ一大變遷トナス而シテ本ニ反リ源ニ溯ルニ固ニ先
 濟ス而後偉人傑士育ニ接シテ出テ遂ニ天下ノ人ヲシテ斯學ノ實用タルヲ知ラシムルニ至レリ今ヤ
 譏刺交至リ嘲笑世ニ滿ツ而シテ先生等豪邁ノ氣毅然動カズ百挫屈セズ遂ニ能ク萬世ノタメニ真理ヲ發
 ラシ其苦辛果シテ如何ゾヤ桂川大槻及兩宇田川ノ諸先生崛起シテ草創ノ業ヲ擴充播揚シ且其美ヲ
 守シテ恬然顧ミサレモノ天下滔々皆然リ前野杉田ノ兩先生獨リ此間ニ立チテ蘭學ヲ主唱スルニ方リ
 ニ後ニ遵フニアラサルヨリハ安ク能ク此ニ至ランヤ嗚呼今ヲ距ル百年文運未タ隆ナラズ舊套ヲ墨
 吾邦斯學ノ隆且盛ナル惟方今ヲ然リトナス抑々開基創業ノ先哲規模ヲ前ニ建テ繼體守成ノ偉才遺訓

先哲祭ヲ行フノ趣意

吾邦斯學ノ隆且盛ナル惟方今ヲ然リトナス抑々開基創業ノ先哲規模ヲ前ニ建テ繼體守成ノ偉才遺訓
 ニ後ニ遵フニアラサルヨリハ安ク能ク此ニ至ランヤ嗚呼今ヲ距ル百年文運未タ隆ナラズ舊套ヲ墨
 守シテ恬然顧ミサレモノ天下滔々皆然リ前野杉田ノ兩先生獨リ此間ニ立チテ蘭學ヲ主唱スルニ方リ
 譏刺交至リ嘲笑世ニ滿ツ而シテ先生等豪邁ノ氣毅然動カズ百挫屈セズ遂ニ能ク萬世ノタメニ真理ヲ發
 ラシ其苦辛果シテ如何ゾヤ桂川大槻及兩宇田川ノ諸先生崛起シテ草創ノ業ヲ擴充播揚シ且其美ヲ
 濟ス而後偉人傑士育ニ接シテ出テ遂ニ天下ノ人ヲシテ斯學ノ實用タルヲ知ラシムルニ至レリ今ヤ
 學問ニ新人皆奮フテ遠西ノ學術ヲ講ス洵ニ人事ノ一大變遷トナス而シテ本ニ反リ源ニ溯ルニ固ニ先
 返精英ノ鍾マレ所ニ後世ニ傳ヘ以テ斯學ノ隆盛ヲ致ス其功德タルヤ遠クシテ且至大ナリ我儕幸
 ニ明治ノ聖代ニ生レ其學孫タルノ名譽ヲ辱フス常ニ先哲ヲ思フテ而シテ見ルコト能ハズ其偉業ヲ回
 想スル毎ニ未ダ嘗テ感涙ニ咽ハズンハアラズ今茲三月四日我儕此處ニ相會シテ諸先哲ノ靈ヲ祭リ
 聊カ以テ景仰ノ微衷ヲ表セント欲ス而シテ我儕カ特ニ此日ヲ撰ヒタルモノハ明和八年三月四日前野
 杉田ノ諸先生江戸小塚原ニ於テ始メテ觀臟ノ舉アリシニ因ルナリ蓋シ此觀臟ノ舉ハ古來ノ妄説ヲ看

破スルノ端緒トナリ茲ニ醫學ノ真理ハ遠西ニ在ルヲ確認スルニ至リタルモノヨリ此三月四日ハ我實驗的醫學ヲ奉スルモノ、念ニ記シテ忘ルベカラサルノ日ナリ」自今而後、此紀念日ノ來ル毎ニ我儕相會シテ先哲ノ靈ヲ祭ルヲ猶本日ノゴトクナランヲ期ス

明治二十五年三月四日

私立獎進醫會

先哲精英之所鍾

解體新書 重訂解體新書

明和八年三月四日(距今百二十年)江戸小塚原ニ於テ觀臟ノ舉アリ杉田玄白前野良澤等ノ諸先生往キテ之ヲ觀、且携ヘ行キタル和蘭ノ解剖圖譜ニ照シ合セ視テ一々符合セルニ驚キ歸路玄白良澤ノ兩先生語リ合ヒテ此和蘭ノ解剖圖譜ヲ翻譯セントシ翌五日蘭化先生ノ宅ニ會シ先生ヲ盟主トナシ杉田玄白及ヒ桂川甫周、中川淳菴、石川玄常、鳥山松園、嶺春泰、桐山正哲ノ諸先生、日ヲ期シ相會シテ其文意ヲ考訂シ杉田先生即夜ニ稿ヲ起シ、年ヲ閱スルヲ四年、稿ヲ改ムルヲ十一回、解體新書ト名ケテ世ニ公ニス、時ニ安永三年(距今百十七年)ノ秋ナリ

杉田先生ノ解體新書ヲ譯スルヤ世人ヲシテ醫道ノ眞面目ヲ知ラシメント欲スルニ急ニシテ遂ニ胡圖ニ附シタルヲナレバ先生モ校正ヲ加ヘテ改刻セントノ念慮アリシガ奈何セシ老衰日ニ迫リテ遂ニ其志

チ果サズ乃チ大槻玄澤先生ニ命シテ代テ校訂セシム大槻先生、師命チ奉シ更ニ原書チ取り反復翫味シ且群書チ考索シ又屢々解體シテコレヲ實景ニ徴シ、歳十年ヲ經、稿凡ソ三タヒ易ヘテ終ニ重訂解體新書チ大成セリ、其出版ハ寛政戊午ノ年ニシテ今チ距ルヲ九十二年ナリ

臟志

寶曆四年二月山脇東洋先生京都ニ於テ始テ罪囚ノ屍チ解キ實驗ニ據テ臟志チ作り大ニ素問靈樞等ノ說ノ妄チ辯ス此事時ノ醫人社會チ刺衝セシヲ最劇シクシテ杉田前野諸先生觀藏ノ舉モコレニ基クヲ少キコアラズ、藏志ノ刻成ハ寶曆九年ニ彼ノ解體新書ノ出版ニ前タツヲ十五年ナリトス

内科選要

宇田川玄隨先生初メ漢方醫籍チ修メシカ後チ桂川甫周先生ニ面シテ和蘭醫說チ聽キ幡然志チ改メテ蘭書チ修メ業大ニ進ム甫周先生嘗テ一書チ示シテ曰ク之チ譯シテ世ニ公行セバ則チ東方未會有ノ業ナリト宇田川先生此言チ聽テ大ニ然リトナシ、刻苦翻譯ノ業ニ從事シ遂ニ西說内科選要十八卷チ著ス、實ニコレ和蘭内科譯書ノ始ナリ、此書ノ出版ハ寛政四年ニシテ距今百年ナリ

瘍醫新書 瘍科新選

杉田玄白先生和蘭ノ外科書チ得テ翻譯ニ着手シタル疔病ノタメニ果サズ門人大槻玄澤先生ソノ業緒チ繼キテ遂ニ瘍醫新書三十卷チ大成セリ蓋シコレヨリ前既ニ和蘭外科醫方チ記シタルノ書アリシト雖モ眞ニ和蘭外科書チ譯シタルハ此書チ以テ始トナス
然レ疔瘍醫新書三十卷中刊行セシハ僅ニ十卷ニシテ完備セズ止ミタリ故ニ瘍科全書チ以テ公行シタルハ杉田立卿先生ノ瘍科新選(天保三年刊行)チ以テ嚆矢トスベシ

眼科新書

杉田玄白先生和蘭眼科書チ獲ンヲチ望ム久シ令嗣元伯先生和蘭眼科書一卷チ獲來テ之チ玄白先生ニ示ス先生大ニ喜ビ直ニ宇田川玄隨先生ニ命シテ之チ譯セシム然ルニ多事執筆稿チ脱スルコ違アラズ依テ立卿先生ニ命シテ之チ譯セシム和蘭眼科新書即是ナリ、于時文化十二年ニシテ距今七十六年ナリ我朝和蘭眼科書チ以テコレチ天下ニ公ニスルヲ斯書ヨリ始マル

和蘭藥選 和蘭藥鏡 遠西醫方名物考

桂川甫周先生ノ和蘭藥選ハ刻ニ上ホラズ、我朝ニ於テ遠西藥劑ノ譯書アルハ和蘭藥鏡ニ始マリ遠西

醫方名物考ニ至リテ大ニ備ハル、此両書共ニ宇田川玄真先生ノ著ハス所ナリ

醫範提綱

解剖ノ科ハ解体新書ニ始マリ重訂解体新書ヨリ醫範及醫範提綱ニ至テ精詳ヲ究ム而シテ其醫範提綱ノ後人ヲ開導セシコハ實ニ莫大ナリト云フ、提綱ノ出版ハ文化二年ニシテ今ヲ距ル八十六年ナリ

醫原樞要

我朝ニ人身窮理(生理)ノ譯書アルコト醫原樞要ヲ以テ其始トナス此書ハ高野長英先生ノ譯述ニシテ其出版ハ天保七年(距今五十七年)ナリ

病學通論

宇田川玄真先生遠西ノ病理書ヲ翻譯シ參攷折衷シテ一書ヲ編セントシ草稿未タ半ナラスノ先生溘焉トシテ實ヲ易ヘタリ門人緒方洪庵先生遺命ヲ奉シ宇田川先生ノ遺稿ヲ校訂シ補修シテ遂ニ病學通論三卷ヲナス是ヲ我朝ニテ病理ヲ説クノ始祖トナス、此書ノ出版ハ嘉永二年己酉ノ夏ニシテ距今四十二年ナリ

植學啓原

我朝只本草ノ科アリテ植物學ナシ斯學アリテ而シテ其書アルハ實ニ宇田川榕先生ヲ以テ濫觴トナス

先生所著植學啓原ハ天保四年ノ刊行コトノ距今五十九年ナリ

氣海觀瀾

青地林宗先生最モ心ヲ窮理ノ學ニ用ヒ格物綜凡ヲ著シ又其要ヲ擇採シテ氣海觀瀾ヲ著ス是ヲ我朝理學書ノ始トナス此書ノ世ニ公コナリシハ文政十年丁亥則チ今ヲ距ル六十五年ナリ

察病龜鑑

診斷法ノ書ハ青木浩齋先生ノ察病龜鑑ヲ以テ始祖トナス此書ノ出版ハ安政四年ニシテ今ヲ距ル三十五年ナリ

舍密開宗

我朝ニ化學ノ書アルハ宇田川榕先生ノ舍密開宗ヲ以テ始トス、舍密開宗ノ出版ハ天保八年ニシテ今ヲ距ル五十五年ナリ

婦人病論

我朝ニ女科ノ譯書アルハ船曳卓先生ノ婦人病論ヲ以テ始トナス、此書ノ出版ハ嘉永二年ニシテ今ヲ距ル四十三年ナリ

近世醫家一覽表 附系統

富士川 游 謹記

姓名	略歴	生レタル年	歿シタル年	著譯書
前野 良澤 名嘉、字子悅、 號樂山後蘭化	豊前ノ人江戸ニ寓シ醫ヲ以テ中津侯ニ仕フ初メ吉益東洞ニ學ビ岐ノ術ヲ能クス年四十七ノ時蘭書ノ殘篇ヲ見テ大ニ發憤シ青木昆陽ニ就テ蘭醫學ヲ學ブ長崎ニ至リ譯官ニ就テ蘭書ヲ讀シテ門ヲ杜チ客ヲ謝シテ之ヲ研究ス中津侯大ニ之ヲ嘉シ號ニ蘭化ト賜フ蓋シ蘭人化身ノ義ナリ又桑名樂翁侯ノ知遇ヲ辱フス解體新書翻譯ノ舉ニ方リテ其盟主トナリ杉田桂川ノ諸氏ト共ニ達ニ之ヲ大成ス世推シテ蘭醫稱首トナス	享保八年	享和三年	和蘭譯文略、簡譯答、助語參攷、地學小成、管齋秘言、駁庸醫、輿地圖、地學篇、魯西亞本記略
杉田 玄伯 名翼、字子鳳、 號九幸又鷗齋	若狹ノ人、世々小濱藩醫タリ外科術ヲ西支哲ニ學ビ經史ヲ宮御龍門ニ受ク和蘭外科書ヲ見テ其精緻ニ驚キ又小濱原州屍解剖ヲ視テ愈々和蘭解剖術ノ精妙ヲ感シ乃チ前野中川ノ諸氏ト謀リ和蘭解剖術ヲ譯サントシ同志相會シテコレニ從事スルヲ四年、遂ニ解體新書五卷ヲ大成ス是レヲ我朝ニテ蘭醫書籍ノ初トナス是ヨリ其名天下ニ鳴リ將軍亦諷ヲ賜フ	享保十八年	文化十四年	解體新書、瘍科大成、形影夜話、蘭學事始、和蘭醫事問答、野叟獨語
桂川 甫周 名國瑞、字公鑑、 號月池	江戸ノ人、世々和蘭外科ヲ以テ幕府ニ仕フ、甫周ニ至リテ蘭醫學ヲ以テ大ニ顯ル安永六年侍醫ニ進ミ次テ法眼ニ叙セラレ又幕府醫學館ノ教諭トナリ外科ヲ擔任ス將軍其外國事情ニ通スルヲ以テ擢用シテ機務ニ參セシメントス偶病ニカヒリテ歿ス	寶曆元年	文化六年	地球全圖、地球圖說、海上備要方、和蘭藥選
中川 淳庵 名麟	世々小濱侯侍醫タリ安富奇頓ニ就テ物産學ヲ講シ又前野杉田桂川ノ諸氏ト共ニ蘭學ヲ講習シ後徵サレテ幕府ノ侍醫トナル		天明ノ初年	和蘭局方、和蘭藥譜、五液精要等

大 規 玄 澤 名及實、字子煥、 號繁水	宇 田 川 玄 隨 名晉、字明卿、 號槐園	宇 田 川 玄 真 名真、字玄真、 號榛齋	杉 田 伯 元 名勳、字士業、 號紫石	杉 田 立 卿 名立、字立卿、 號錦腸	小 石 元 俊 名道、字有素、 號大愚
陸奥ノ人ナリ初メ藩醫建部清庵ニ就テ學ブ時ニ杉田 玄白蘭方ヲ唱ヘテ其名遠近ニ噪シ清庵乃チ玄澤ヲ 玄白ノ許ニ遣シ就テ學ハシム後又贊ナ前野長澤ニ執 リ愈蘭學ヲ研ム仙臺侯召シテ侍醫トナシ文化八年幕 府命シテ蘭書ヲ翻譯セシム蓋シ台旨ヲ奉シテ洋書ヲ 譯述スルハ是ヲ以テ初トス	美作ノ人ナリ家世々儒醫ヲ以テ津山侯ニ仕フ初メ痛 ク西洋醫說ヲ排斥セシガ桂川甫周大槻玄澤ノ説ニ用 テ幡然悟ル所アリ專ラ蘭書ヲ修メ最モ力ヲ内科ニ用 フ嘗テ内科選要十八卷ヲ著ス是ヲ我邦内科譯書ノ初 トナス	本姓安岡伊勢ノ人ナリ大槻玄澤ノ門ニ入りテ蘭學ヲ 講シ后宇田川玄隨ニ從テ學ブ文化十年幕府ノ命ヲ奉 シテ蘭書ヲ司天臺ニ職シ尋テ將軍ニ謁見テ許サレ奉 津山藩侯特ニ褒チ進メテ優待ス初メ宇田川玄隨死シ テ嗣ナシ門人故舊相議シテ玄真ヲシテ其後ヲ承ケシ ム由テ宇田川氏ヲ冒ス	初メ流儀ト稱ス一蘭藩醫建部清庵ノ子ナリ杉田玄白 養フテ之ヲ子トナス能ク家學ヲ修メ尤モ意ヲ治術ニ 盡ス	杉田玄白ノ子ナリ父ノ志ヲ紹テ西洋眼科ヲ修メ別ニ 一家ヲ起ス後幕府ノ命ヲ奉シテ蘭書ヲ天文臺ニ翻譯シ 次テ將軍ニ拜謁ス	初メ醫ヲ淡輪元澄及永富鳳介ニ學ビ后杉田玄白ノ解 休新書ヲ見テ其精微ニ服シ江戸ニ來テ大槻玄澤ノ門 ニ入りテ蘭學ヲ精メテ大ニ和蘭醫術ヲ京坂ノ間ニ唱 フ所ニ同カラズ門人ヲ遺シテ論辯セシム后元俊刑屍 ヲ解テ東洋ノ妄ヲ辯ス東洋亦如メテ其精確ニ服スト 云フ
寶曆七年	寶曆五年	明和六年	寶曆十三年	天明六年	天明四年
文政十年	寬政九年	天保五年	天保四年	弘化二年	文化五年
重訂碎體新書、癘醫新 書、蘭學格條、六物新志 蘭藥摘方、官能真言、萬 部、蘭說辨惑、其他十數	西說内科選要、遠四名 物考、東西病考、西洋醫 言、西文矩	遠西醫範、醫範提綱、和 蘭藥鏡、遠四名物考	癘醫方範	和蘭眼科新書、癘醫新 書、西洋醫原、眼科啓微 手術摘要等	波留麻和解

稻 村 三 伯	橋 本 宗 吉 名鄭、字伯敏	宇 田 川 榕 菴 名榕	青 地 林 宗 名盈、字子遠、 號芳齋	吉 田 長 叔 名成德、字直心、 號酌谷	十 束 井 齋 名持遠	足 立 長 雋 名世茂、號無涯	飯 沼 龍 夫 名長順、號慈齋
鳥取藩醫ナリ蘭學格條ヲ見テ感奮シ東遊ノ業ヲ大槻 玄澤ニ受ケケ宇田川玄真蘭田甫就等ト江戸ハルマテ著 ス后致仕シ名ヲ海上隨鷗ト更メ近江海上郡ニ寓シ大 ニ蘭學ヲ京師ニ唱フ	大坂倉屋ノ子ナリ小石元俊見テ之ヲ奇トナシ勸メテ 大槻玄澤ニ就カシム學成リ歸テ醫業ヲ大坂ニ開ク其 名稱馳ス文政十二年耶蘇教ノ獄ニ連坐シテ刑死ス	大垣ノ醫員江澤養樹ノ子ナリ宇田川玄真養フテ子ト ナシ己ノ家ヲ嗣カシム少ノ物産學ヲ好シ長スルニ及 テ業ヲ馬場塾里ニ受ケケ學大ニ進ム蓋シ我邦化學ヲ講 スルモノ榕菴ヲ以テ標與トナス	江戸ノ人、少ノ京攝ノ間ニ遊學シ后専ラ洋學ヲ修メ 紀事ヲ譯シ又輿地志六十五卷ヲ譯ス天保三年水戸侯 聘シテ醫員トナシ兼テ洋學ヲ都講ス其冬歿ス	初メ幕府醫官土岐長元ニ學ヒ后蘭學ヲ桂川甫周ニ受 ケ此時蘭科ト稱スルモノ外科ヲ主トス長叔獨リ和蘭 内科ヲ以テ開業ス物議大ニ起リ而シテ長叔少テ即日上 道日ヲ兼テ加賀ニ赴キ途中疾ニ遭ヒ金澤ニ到テ歿ス	儒ヲ松崎懌堂ニ學ビ醫ヲ桂川甫周ニ學ブ掛川藩侯其 篤學ヲ嘉シ侍醫トナス	初メ漢醫方ヲ足立梅菴及多紀安長ニ受ケ篠山侯其 名ヲ聞キ聘シテ侍醫トナス后吉田長叔ニ從テ蘭書ヲ修 メ遂ニ和蘭產科ヲ以テ一家ヲ開ク	初メ本草ニ志シテ小野蘭山ノ門ニ入り後醫ニ志シテ 宇田川玄真ノ門ニ入り又藤井方亭ニ就テ學ブ學業成 リ歸テ業ヲ大垣ニ開キ大ニ蘭方ヲ唱フ幕府其名ヲ聞 テ召スト雖モ衰老ヲ以テ辭シテ就カズ
文化七年	文政十二年	寬政十年	安永四年	安永八年	天明二年	安永五年	皇朝草本圖說
弘化三年	文政七年	天保四年	天保七年	天保十四年	天保七年	醫方研幾	皇朝草本圖說
舍密開宗、植學啓源	格物綜凡、氣海觀瀾、輿 地誌	泰西熱病論、內科解環、 蘭藥錠原					

小森 玄良 名義啓、號桃塙	藤林 泰輔 名元紀、字君諧、號香山	藤井 方亭 名俊、字士德	坪井 信道 名道、字信道、號誠軒	箕作 玩甫 名虔儒、字序西、號紫川	杉田 成卿 名信、字成卿、號梅里	新宮 涼庭 名頌、初稱涼亭、號鬼國山人
美濃ノ人、海上碩儒ニ就テ蘭書ヲ修メ能ク治術ヲ究ム公卿之ヲ延テ奇效ヲ得ルモノ數々アリ乃チ朝ニ薦ム文政三年從六位ニ叙シ肥后介ニ任セラレ累進シテ從五位ニ至リ信濃守ヲ兼メ蓋シ洋方醫術ヲ以テ朝廷ニ出入スルト是ヲ以テ初トス	山城ノ人、儒籍國典ニ兼通シ尤モ和歌ニ長ス江戸ハルマナチ得テ熱讀玩味シテ字田川玄真ト號シ往復シテ蘭學ヲ講習シテ後上隨賜ニ就テ學ブ文政五年有栖川宮近習ニ擢テラレ	伊勢ノ人ナリ江戸ニ遊ヒテ字田川玄真ノ門ニ入り和蘭醫方ヲ學ブ后加賀侯ノ侍醫トナリ翻譯兼掌ヲ命セラル	美濃ノ人ナリ、江戸ニ出テ、字田川玄真ノ門ニ入り西洋醫術ヲ學ビ業大ニ進ム其姓名ヲ聞テ聘シテ侍醫トナス累ニ俸ヲ加ヘテ三百石ニ至ル	美作ノ人、父貞岡醫ヲ以テ津山侯ニ仕メ文政五年侍醫ニ擢テラレ后侯ニ從テ江戸ニ來リ字田川玄真ノ門ニ入り天保十年幕府命シテ司天臺譯員ニ補シ本藩亦其症ヲ進ム安政元年魯國使者下田ニ來レ幕府條約ヲ假定ス玩甫其議ニ與カル安政二年進テ將軍ニ謁シ翌年始メ藩書調所ヲ建ツ玩甫及杉田成卿ヲ奉テ教授トナス文久二年辟サレテ幕府ニ列ス蓋シ洋學ヲ以テ幕臣トナルモノ是ヲ始トス	立脚ノ子ナリ坪井信道ニ就テ醫學ヲ學ビ最モ蘭學ニ精シ弘化ノ初蘭人書ヲ上リテ米國將ニ日本ニ航シテ來テ講シテ其書ヲ翻譯セシム安政三年進テ將軍ニ謁シ次テ藩書取調所教授ニ任セラレ	内科選要ヲ讀ミテ和蘭醫方ニ志シ長崎ニ赴キ苦學年アリ蘭國語ノ醫師トナリ館内ノ治療ヲ擔當シ其効績ニ依リ蘭國王ヨリ賞書ヲ賜フ后京都ニ歸リ業ヲ開キ大ニ行ハル
天明二年	天明元年	文化九年	寬政七年	寬政十一年	文化十四年	安政元年
天保十四年	天保七年	文化九年	嘉永元年	文久三年	安政六年	安政元年
蘭方樞機、病因精義、泰西方鑑、病診要訣	譯、蘭學經、和蘭語法、遠西度量考、西域本草、西醫方選、西醫今日抄等			外科必讀、產科簡明、泰西名醫彙講、知生鏡原、泰西春秋、泰西史影、八紘通誌等	濟生三方、砲術訓蒙、萬寶玉手箱、醫戒	窮理外科則、解休則、小兒全書、療治環言、醫國新話等

高野 長英 名讓、號瑞阜	高良 齋 名淡、字子清	小關 三英 名好義、號篤齋	鈴木 春山 名強、字白強	緒方 洪庵 名章、字公裁	緒方 郁藏 名郁、字子文、號研堂
陸奥水澤ノ人、江戸ニ來リテ吉田長叔ノ門ニ入り又長崎ニ往キシハボルトニ就テ學ブ后江戸ニ還リテ麵町ニ業ヲ開キ偶々英人モリソノ我漢民ヲ送リ來ラントスルノ報アリ長英乃チ其記事ヲ造リテ之ヲ擴フノ不可ナレ所以ヲ述ブ其書中ニ在テ變社遺逸小説著ナリトテ牢獄ニ繫カル獄中ニ在テ變社遺逸小説著ナリトテ牢獄ニ繫カル獄中ニ在テ變社遺逸小説著至リ鳥啼一首ヲ遺ル后獄ヲ破リテ逃走シ宇島ニ殺シ名ヲ澤三伯ト變シテ翻譯ニ從事ス事露ハレテ自殺ス	德島ノ人、長崎ニ至リテシハボルトニ從ヒ專ラ眼科ヲ修ムルヲ八年業大ニ進ム后シハボルトノ獄ニ連シテ獄ニ入りル幾モナク救サレテ藩ニ歸ル后大坂ニ轉シ其名益顯ハル明石侯聘シテ醫員トナス	出羽莊内ノ人ナリ、業ヲシハボルトニ受ケ尤モ蘭文ニ精シ岸和田藩侯ノ聘ニ應シテ侍醫トナル天保四年幕命ヲ受ケテ與地志ヲ譯ス后高野長英渡邊華山ノ縛ニ就クヤ連半ヲ恐レテ自殺ス	田原藩醫員ナリ廣瀬淡窓、朝川善庵ニ就テ經史ヲ學ビ父高野長英小關三英等ト共ニ蘭書ヲ修ム	備中足守ノ人、江戸ニ來リテ坪井信道ノ門ニ入り蘭書ヲ習讀シ又傍ラ字田川玄真ニ親炙シテ教ヲ受ク后長崎ニ遊ビ蘭醫ニ就テ大ニ得ル所アリ還テ業ヲ大阪ニ開ク名聲大ニ興ル足守侯權ヲ侍醫トナシ幕府亦召シテ侍醫法眼ニ任シ尋テ西洋醫學所頭取ニ任セラ	聖冠江戸ニ遊ヒテ坪井信道ノ門ニ入り蘭書ヲ讀メ己ニ父命ヲ奉リ歸郷ス偶同門ノ先輩緒方洪庵大阪ニ在テ業ヲ開キ大ニ行ハル乃チ往テ之ニ就キ專ラ蘭書ヲ究ム洪庵委ヌルニ教導ノ任ヲ以テシ且緒方氏ヲ冒カサシム
文化元年	寬政十一年	天明七年	享和元年	文化七年	文化七年
嘉永三年	弘化三年	天保十年	弘化三年	文久三年	文化七年
醫源樞要、瑞阜活套、和蘭史略、西洋雜誌、瘟疫考	西醫新書、内科捷徑、外科精義、飲食要訣、女科精選、眼科便用、驅梅用法		三兵活法、海上攻守略、說、兵學小識	病學通論、扶氏經驗遺訓、虎狼利治準	內外新法、日新醫事鈔、外科手術全書、藥性新論等

川本幸民	世々九鬼侯ノ醫員タリ、江戸ニ出テ、足立長尚ノ門ニ遊ビ尋テ坪井信道ニ從テ學ブ安政三年洋書調所教授ニ任セラレ文久二年遂ニ幕籍ニ列シ箕作阮甫ト列ナ同フス	文化七年	明治四年	氣海觀瀾廣義、理學原始、舍書讀本、依百乙人身窮理、化學初教等
青木周弼 名邦彦、號浩齋	初メシイホルトニ就キ后坪井信道ノ門ニ入り又宇田川樸齋ニ就テ學フ藩主毛利侯其名ヲ聞キ聘シ醫員トナス次テ侍醫ニ擢ラル		萬延元年	察病龜鑑
廣瀬元恭 名襲、字禮卿、號藤園	甲斐ノ人、蘭書ヲ坪井信道ニ學ビ其塾ヲ幹ス、后京師ニ遊ビ帷下シテ蘭學ヲ講ズ紀州侯其名ヲ聞キ聘スルヲ類ナリシモ應セズ后津侯ノ聘ニ應シ醫員トナル	文政四年	明治三年	理學提要、人身究理、知生論、西醫脈鑑
佐藤泰然	江戸ノ人、足立長尚ニ就テ醫ヲ學ビ高野長英ニ從テ蘭書ヲ學ブ后長崎ニ赴キ居ル四年ニ歸ル佐倉侯ノ聘ニ應シテ下總ニ移リ名聲日ニ噪シ最モ外科ニ名アリ	文化元年	明治五年	
大槻俊齋 名肇、字仲敏	陸奥ノ人、醫ニ志シテ家ヲ出テ奔テ江戸ニ上リ手塚真仙ノ門ニ入り傍ヲ交テ高野長英小關三英等ニ締ヒ蘭書ヲ講習ス后長崎ニ遊ヒ大ニ得ル所アリ還テ江戸ニ開業ス仙臺侯召シテ侍醫トナス	文化三年	文久二年	銃創鎖言
伊東玄朴 名淵、字伯壽、號冲齋	肥前ノ人ナリシイホルトニ就テ學ブ七年余、江戸ニ來リテ業ヲ開ク鍋島侯聘シ侍醫トナス安政四年同志ト相謀リ種痘箱ヲ府下ニ建ツ明年幕府擢テ、内院醫師トナシ法印ニ叙シ長春庵ノ號ヲ賜フ	寬政十二年	明治四年	醫療正始
戸塚靜海 名維、字藻、號春山	遠州掛川ノ人、十束井齊ニ就テ蘭書ヲ講シ后シールホルトニ就テ學ブシイホルトノ獄ニ連坐シ獄ニ下ル故サレテ后江戸ニ來リ業ヲ府下ニ開ク薩摩侯聘シテ藩醫トナス尋テ幕府辟シテ侍醫トナシ法印ニ叙ス	寬政十一年	明治九年	

堀内素堂
名寛、字忠龍

米澤侯ノ侍醫、最モ心ヲ小兒科ニ注キ又心ヲ實用ニ致ス

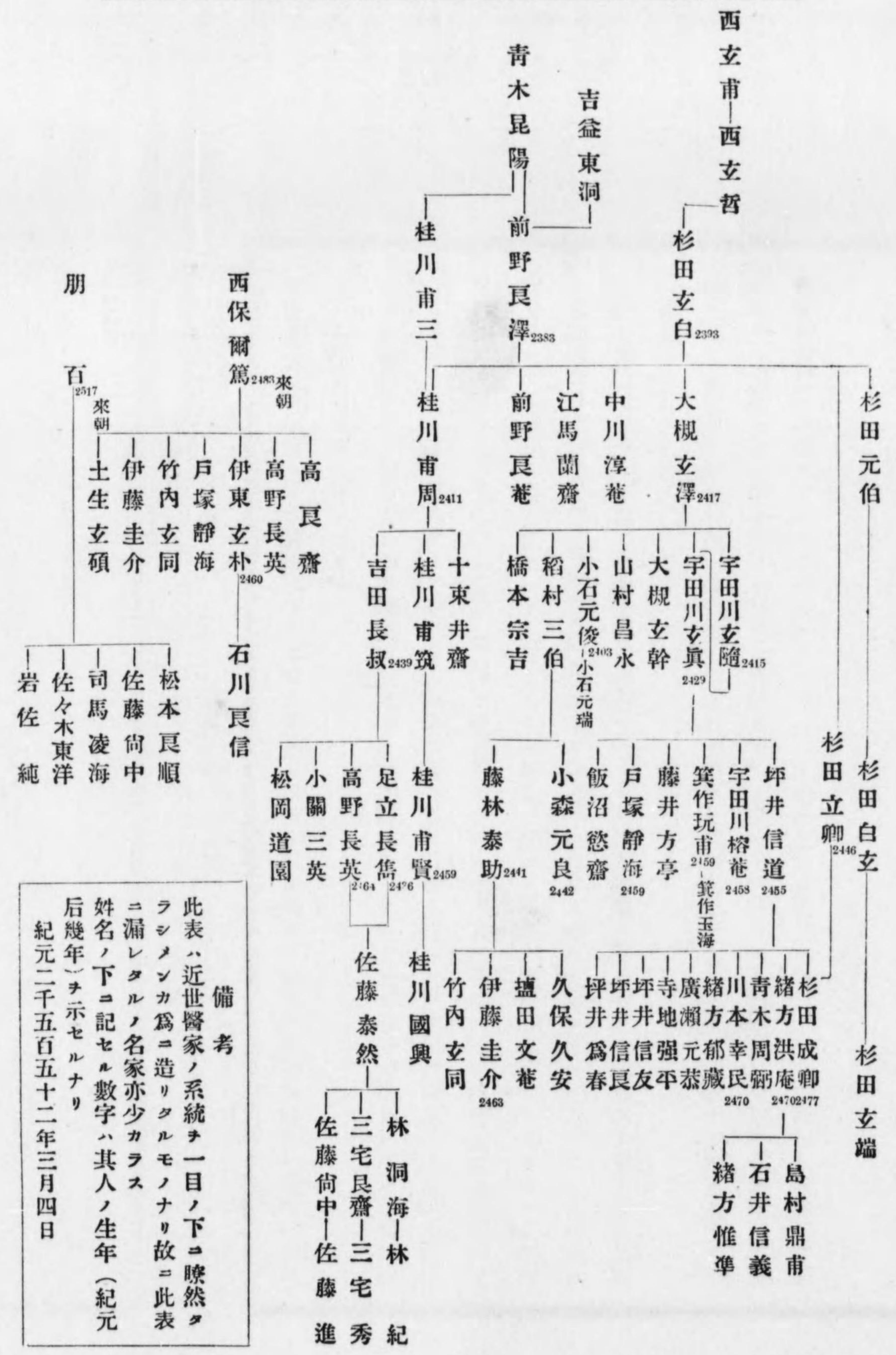
土生玄碩

安藝ノ人、世々眼科ヲ以テ顯ハレ玄碩ニ至テ最モ名アリ嘗テシイホルトニ學ブ幕府擢テ、侍醫トナス後深川ニ開業シテ其名益高シ

幼幼精義、保嬰環言

右ノ表ニ漏レタル名家甚ク少カラズ嶺春泰、石川玄常、鳥山松園、桐山正哲、江馬蘭齋、前野良庵、大槻玄幹、山村昌永、小石元瑞、箕作玉海、黒川良安、宮本元甫、日野鼎哉、寺地強平等諸先生ノ如キ即是ナリ此等ノ諸先生中ニハ其履歷行狀ノ逸シテ今ニ傳ラザルモノ多シ此篇屬稿匆卒ニ出テ、之ヲ穿索スルヲ得サリシハ記者ノ深ク遺憾トスル所ナリ又其履歷及著譯書等モ只其梗槩ヲ舉ルノミ故ニ其一斑ニ過キズト雖而モコレニ因テ其全豹ヲ察スルニハ餘アリト信ズ

近 世 醫 家 系 統



備 考

此表ハ近世醫家ノ系統ヲ一目ノ下ニ瞭然タ
 ラシメシカ爲ニ造リタルモノナリ故ニ此表
 ニ漏レタルノ名家亦少カラス
 姓名ノ下ニ記セル數字ハ其人ノ生年(紀元
 后幾年)ヲ示セルナリ
 紀元二千五百五十二年三月四日

先哲祭

富士川 游

余等ガ僭越ヲモ願ミズシテ先哲祭ヲ創ムベキヲ唱ヘ又之ヲ實行スルニ至リタル所以ハ藤根君ガ讀マレタル開會ノ辭ノ中ニ詳ナレバ更ニ贅辯ヲ費スマデモナシ然レトモ我學問ガ今日ノ盛況ニ至リタルマテノ成行ヲ畧叙シテ以テ諸先哲ノ高德ヲ景仰スルノ微衷ヲ表スルハ敢テ無益ノコトモアラザルベシ

南蠻寺興廢記ヲ讀ムコト曰ク永祿年間ウルガントイヘル蠻人長崎ニ漂着ス織田信長召シ見テ其言ヲ聽キ京都四條ニ南蠻寺(初メ永祿寺ト稱ス)ヲ建テ、之ニ居ラシム而シテウルガン一人ニテハ弘法力ニ叶ベカラズ本國ヨリ數人招呼ベシトアリケレバ其命ニ應シテフラテン、ケリコル、ヤリイスノ三僧來レリ此ケリコル、ヤリイスノ兩僧ハ醫術ニ妙ヲ得シモノナリケレバ其術ヲ徒弟梅庵、告須蒙、壽間ノ三人ニ傳ヘシト見ユ天正十三年豊臣秀吉此寺ヲ廢シ悉ク其徒ヲ捕ヘシメシ時ニ梅庵等ハ辛クモ逃レ去リ凡四年ヲ經テ告須蒙ハ外科醫トナリ壽間ハ内科醫トナリテ共ニ泉州堺ニ開業セント云フコレ恐クハ西洋醫術傳來ノ始メナラン

其後カスバルト云ヘル外科醫來リテ其術ヲ傳ヘシヲアリ又長崎ニテ醫術ヲ和蘭ノ醫師ニ受ケシモノ

モ亦少カラズ杉本、西、栗崎、檜林、吉雄等ノ諸家はナリ中ニモ杉本、西ノ兩家ハ幕府ニ召サレテ醫官ニ列シ所謂紅毛外科ヲモツテ當時ニ鳴リタルナリ

然レドモ其術ハ皆口傳手習ニ出テタルノミニシテ書籍ニ就テ之ヲ講習シタルニアラズ而シテ眞ニ西洋傳來ノ醫術ト云ヘキハ直チニ其蟹行ノ書ヲ讀ミタルニ起ルモノナレハ其濫觴ヲ尋ヌルニハ蘭學ノ起原ニ溯ラサルベカラズ

六代將軍家宣公尙ホ世子タリシ時新井白石先生其侍講タリ羅馬人薩摩ニ漂泊シ來リシニ言語侏僂譯官通スルヲ能ハズト聞キ先生曰ク語路ノ通セサルハ只書轉ノ訛ノミ吾能ク之ヲ解カント召シテ江戸ニ致シ事情ヲ審問シテ其要領ヲ得乃チ西洋紀聞采覽異言ノ二書ヲ造リテ上ラレタリト實ニコレ蘭學ヲ唱道スルノ基ナリ

八代將軍吉宗公和蘭ノ學術ニ精シキヲ知リ且其書籍ヲ見テ圖書ノ細密ナルニ感シ青木昆陽(儒官)野呂元丈(醫官)ノ兩先生ニ命シテ蘭書ヲ講セシム、青木先生等命ヲ奉シテ長崎ニ行キ蘭人及譯官ニ就テ蘭書ヲ學ビ粗々大意ヲ會得セラレタリト云フ是レ蘭書ヲ講習スルノ始ナリ

寶曆明和ノ頃前野蘭化先生崛起シテ蘭學ヲ唱ヘ杉田玄白先生亦奮起シテ之ニ應ズ、兩先生苦心經營ノ大概ハ杉田先生自記ノ蘭學事始ニ詳ナレバ余今之ヲ述ブルノ要ナシ但余ガ一言セントスルハ此兩

先生ガ西洋ノ醫術ヲ首唱セラレタル初歩ノ解剖ノ實驗ニアリシヲ是ナリ而シテ此解剖ノ實驗ハ山脇東洋先生所著臟志ノ刺戟ニ因ルヲ最多キヲ余ノコ、ニ特言セント欲スル所ナリ

山脇先生ノ臟志二冊ハ此處ニ持參シテ他ノ諸先哲ノ著書ト共ニ之ヲ祭場ニ供ヘタリ諸君モ知ラル、如ク古來學者ノ臟象ヲ説クモノ盡ク徵ヲ素問靈樞難經ニ取ルノミニ之ヲ實驗スルヲナク代々ノ學者尊崇奉戴シテ復タ疑ヲ容ル、モノナシ獨リ我山脇先生アリ大ニ疑フ所アリテ遂ニ刑屍ヲ解キ觀ル所ヲ記シテ藏志ヲ著シ以テ痛ク素靈以下ノ妄說ヲ駁セシカバ當時ノ醫學社會ハ爲ニ攪亂セラレタルヲ甚シク或ハ非藏志ヲ著シテ之ヲ罵ルモノアルニ至レリ時維レ寶曆九年ニシテ杉田先生等ガ小塚原ノ觀臟ノ舉ニ前タツコト十餘年ナリ

蓋シ當時(寶曆明和ノ頃)ハ近古ニアリテ我醫道最モ旺盛チ窮メタルノ時代ニシテ後藤良山、山脇東洋、吉益東洞、香川修菴、ノ諸先生京都ニ在リテ古方ノ說ヲ唱ヘ其論天下ヲ風靡シ居ルノ姿ナリケレバ、前野杉田兩先生等ノ發憤モ亦實ニ此ニ基スル所多シ杉田先生著形影夜話ノ中ニモ明ニ此事ヲ記シタル所アリテ余カ臆測ノ言ニハアラズ、而カモ其近因ヲ求ムレハ蘭書圖書ノ精緻ナルト藏志所說ノ警振ナルト此二事ノ大ニ刺戟ヲ與フル所トナリテ乃チ西洋醫術傳來ノ基ヲ爲スニ至リタルナラン杉田先生ノ解體新書一タヒ出テ、ヨリ天下ノ俊髦雲ノ如ク争ヒ起リ大槻磐水、桂川月池、宇田川槐園

宇田川榛齋等ノ諸先生ヲ始トシ圖書ノ精緻ニ服シテ其學ヲ講習スルノ人少カラズ別表ニ示セルガ如ク相傳ヘテ研究ニ研究ヲ積ミ學術愈々精緻トナリ内科選要、重訂解體新書、醫範提綱、熱病論、氣海觀瀾、泰西方鑑、醫方研幾、瘍科新選、眼科新書、名物考、藥鏡、西醫方選、舍密開宗、植學啓源、醫源樞要、病學通論、婦人病論等ノ書次第ニ世ニ行ハレ人身内景ノ學ヨリ内外疾病ノ治法、藥劑ノ主能製煉、格物窮理ノ學ニ至ルマデ一トシテ備ハラサルナキニ至ル、實ニ僅々六七十年間ノ一トハ思ハレサルホトノ大進歩ナリ

弘化嘉永ノ頃ニ及ビテ漢方醫トノ軋轢甚シクナリテ遂ニ奧醫師ハ蘭方醫術ヲ修ムルヲ相成ラズトノ禁令出ツルニ至リ尙且ツ蘭方醫書ノ出版ヲ禁シ又既ニ開版トナリタル書物ノ中ニテ何々ノ書ハ讀ムヲ得ズトノ禁令モアリタリ

而ノ我醫術ガ右等ノ苦界ヲ脱シテ始メテ時ノ政府將軍家ニ用ヒラル、ニ至リシハ安政五年七月將軍家危急ノ容體ニ迫マリタルノ時ナリ此時召シ出サレシハ戸塚靜海、伊東玄朴、大槻俊齋、竹内玄同等ノ諸先生ニシテ將軍ノ病症ハ脚氣衝心ナリシト云フ、是ニ於テカ余ハ曰ントス、我實驗的醫學ノ政府ニ用ヒラレタル機會ノ脚氣診治ナリシヲ亦奇因縁ナリト嗚呼脚氣病ハ日東固有ノ地方病ナリ此地方病ヲ治センカ爲ニ政府ハ從來ノ嚴禁ヲ解テ我諸先哲カ辛苦經營ニ成リタル實驗的醫學ヲ用フルニ至

レリ是豈ニ先哲諸公ノ靈地下ニ在リテ指示セシ所ナラズヤ吾人學孫タルモノ孜々勉勵セズンハアルベカラサルナリ

本日此處ニ諸君ト共ニ先哲ノ靈ヲ祭ルニ方リ謫劣自ラ揣ラズ敢テ一言ヲ述ヘテ以テ景仰追慕ノ微衷ヲ表ス

因ニ曰フ、近世醫事ノ沿革及ヒ先哲辛苦ノ事蹟ヲ詳ニ知ラント欲セハ宜シク左記ノ書ヲ參看スベ

- 近世名醫傳
- 洋方醫傳
- 皇國醫事沿革小史
- 皇國名醫傳 同續篇
- 愛國叢談
- 日本醫道沿革考
- 蘭學事始
- 近世醫事沿革

先哲祭ノ席上ニ於テ

高田耕安

今日余輩先哲諸氏ノ靈ヲ祭ル則チ本邦ニ於ケル現今醫學ノ開祖ヲ記念スルニ際シ少シク所感ノ開陳スベキアリ諺ニ曰ク萬事創始ハ困難也(Aller Anfang ist schwer)ト然ルニ余輩ノ學祖ハ能ク創始ノ困難ニ打テ勝テ現今ノ如キ醫學隆盛ノ端緒ヲ開ケリ其卓見其膽力實ニ余輩ノ敬仰スル所ナリ爾他本

邦文明史上醫學ヲシテ開化ノ先導者即チ歐洲文物輸入ノ燈光タル名譽ヲ享有セシムルハ全ク先哲諸氏ノ功績ニアラズシテ何ゾ余輩今直接先哲諸氏ノ德澤ヲ受クルコトナキガ如クナリト雖モ學祖ハ其養成セシ諸人士其當時ニ爲セシ警醒ノ事業等ニ由リ管ニ余輩後進醫學者ノ爲ノミナラズ總テ日本國人ノ大恩人トナレルコトハ余輩ノ喋々待タズシテ明ナリ故ニ余輩今恭シク感謝ノ意ヲ表示スルハ素ヨリ其分ナリトス凡ソ祭典ヲ營ムコトハ或ハ香ヲ燒キ或ハ物ヲ供スルヲ慣例トセリ然モ余輩先哲諸氏ヲ祭ルコトハ此ノ如クスルヲ要セザル可シ先哲ヲ祭リ學祖ノ靈ヲ慰ムルニ必要ナルモノハ何ゾ余輩後進醫學者ガ現今ニ於テ作爲スル事業ニアラズヤ余輩力微弱ニシテ數フルニ足ラズ然モ各力ヲ盡シテ斯醫學ノ爲ニ勉ムルハ假令其狀況方法種々ナリト雖モ學祖ノ前ニハ芳シキ香ヲ先哲ノ靈前ニハ美シキ供物ヲラン故ニ余輩謹テ記念スベキ此先哲祭ニ際シ今斯道ノ爲ニナセル一些事ヲ告白シ以テ燒香供物等ノ祭具ニ代ヘント欲ス告白前余ノ心ニ浮ベル一事ノ陳ブベキアリ他ニアラズ日本醫學發達ノ順序ナリ試ニ之ヲ三時代ニ區別スレバ其第一時代ハ新醫學輸入ヲ主トスルモノニシテ正ニ先哲學祖之ヲ爲セリ第二時代ハ新醫學攻究ノ時代ニシテ其學說當ヲ得タルヤ否或ハ日本ノ風土ニ適合セルヤ否或ハ如何ニ適用スベキカ否或ハ此地ニ在リテ彼地見ザルモノアリヤ否等ヲ格物實驗ニ徵シテ確定スルヲ事トス是レ余輩ノ目下爲スベキ所タリ若シ格物實驗ヲ務メズンバ古昔漢醫方ニ於ケル如ク

其是非ヲ辨セザルノ弊害ニ陥ルアラソ第三時代トハ彼數多ナル不明ノ病理不治ノ疾患ニ對シ燭光ヲ發揮スルコト例之ハゼンナル氏ガ防疫法ヲ生出セシメタルガ如ク爲スベキモノニシテ後世ニ屬セリ夫レ本邦醫學發達ノ順序ヲ區別スルキハ畧ボ此ノ如クナルヲ得ベシト雖モ決シテ其境界判然タルニアラザルハ勿論ニシテ例之ハ既ニ第一時代ニ於テ百二十一年前ノ今日杉田、前野等ノ諸先哲ガ和蘭解剖圖譜ヲ繕キ實物ニ照シテ其當否ヲ檢シタルハ既ニ第二時代ノ端緒ヲ成セリ又目下即チ第二ノ時代ト雖モ歐米ノ諸書ヨリ輸入譯述スベキモノ實ニ甚多シ恐クハ又第三時代ニ於テモ輸入スベキ事物多々ナラン爾他近年緒方博士ノ免厄法發見ハ既ニ第三時代ノ始ヲ爲スモノトス今此先哲祭ニ於テ謹テ學祖ヲ記念シ燒香供物ニ代ヘテ靈前ニ捧獻セント欲スルハ余輩微力者ノ目下爲ストコロノ些事ノ告白ナリ抑痘瘡ノ豫防方法ハゼンナル氏ノ効ニ由リ既ニ具備セルモノモ拘ハラズ當時非常ノ流行ヲ爲スニ遭遇シタルノ機會ニ際シ痘瘡ノ病性ヲ檢索スルハ余輩ノ義務本分ニシテ且興味アルコト信シ余ハ學長ノ賛成ヲ辱フシ本務ノ餘暇ヲ以テ本所、駒込兩避病院ニ出張シ次ノ諸點(今畧シテ茲ニ記載セズ)ニ就テ調査セリ其際興味アル實驗少ナカラズ而シテ成書所述ノ精確ニ感服スルコトアリ或ハ其所說ノ不當ヲ發見スルコトアリ例之ハ彼成書ニ殆ト必發ノ如ク稱セラレタル腰痛、頭痛ノ如キ毫モ之ヲ發セザル者實ニ罕ナラス又發疹ノ如キモ必ズシモ顔面等身体上部ヲ先ニセ

サルガ如シ他日詳細報告スルアラシ終ニ臨ミ尙ホ一言先哲諸氏ニ對シ告ゲント欲ス本邦醫學ノ爲ニ力ヲ致スコトハ之ヲ先哲諸氏ノ勞ニ止メズ微力ナル余輩ト雖モ希クハ力ヲ斯學ノ前進開發ノ爲ニ盡シ以テ學祖ノ志ヲ繼グヲ得ンコトヲ

先哲祭ニ就テ

村上庄太

我獎進醫會友ガ共ニ議リテ本日爰ニ先哲祭ヲ舉行スルニ際シテ不肖庄太其席末ヲ瀆スノ榮ヲ得テ實ニ歡喜ニ堪ヘサルモノアリ謏劣自ラ揣ラス敢テ一言スル所アラントス
倍先刻來諸君ノ高話ヲ謹聽シテ我醫學近世ノ歴史及ヒ特ニ先哲創業ノ苦辛ヲ明コシ更ニ景仰ノ念ヲ増シタルハ云フマデモナキ事ナリ而シテ吾人今先哲ノ遺德ヲ追慕シテ此祭典ヲ舉行シタル機トシ學術ノ外又我醫ノ德義ヲ獎ムルコトヲ誓フテ以テ先哲諸氏ノ功勞ニ酬ユルコトクンハアラズ
顧ミテ我醫ノ社會ノ狀態ヲ察スルニ其言論ハ嘲笑詬罵ニ止リテ徒ニ喧嘩ニ過キサルモノ多ク其所爲ハ驕慢詐僞以テ得々タルモノ少カラズ或ハ富貴ニ淫シ或ハ聲色ニ醉ヒ或ハ名利ニ迷ヒ其甚シキニ至テハ實ニ言フニ忍ヒサルモノナキニアラズ豈痛歎ノ至ナラズヤ蓋シ世人志ヲ學問ノ一方ニ向ケ德義

ノ點ニ於テハ之ヲ顧ミルコト尠シ德義日ニ頹敗スル所以ナリ

然ラハ何ニ由テ德義ヲ獎ムヘキヤト問ハント曰ク一言以テ盡スヘキノミ破邪顯正是ナリ抑モ邪說アレハ之ヲ打破シ曲事アレハ之ヲ辯難スルハ必要ノコトニシテ時コト已ムヲ得ザルコトナキニアラズ然レモ只其一方ニ偏シ邪ヲ破フリ惡ヲ訶クノミニテハ假令千言萬語ヲ費スモ其詮ナカルベシ必スヤ破邪ト顯正ト相俟テ而シテ後始メテ其目的ヲ達スベキノミ今日世上ニ存スル所ノ醫會一ニシテ足ラズ皆其規則ニ明記シテ曰フ醫ノ風儀ヲ保持スト殊ニ知ラズ此華美ナル言語ハ多クハ只規則ノ上ニ存スルノミナルニ過キサルコトヲ我獎進醫會モ亦醫ノ風儀ヲ持スルコトニ最モ熱心ナルモノニ其今日マテノ事業ノ方針ハ着々此方向ニ進ミタリ而シテ今ヤ更ニ一步ヲ進メテ此禮節ノ典ヲ舉グ、其舉微ニ似タリト云フト雖亦豈空前ノ美事ニアラズヤ、嗚呼此ノ如クニシテ而シテ始メテ前賢ノ美德ヲ顯シ先哲ノ偉行ヲ揚ルコトヲ得、誠ニ中心景仰ノ致ス所ニ由ラスンハアラスト雖モ而モ亦徒ニ邪ヲ破ルニ汲々タル世人ノ轍ヲ覆マスシテ却テ顯正ノ手段ヲ取ラントスルノ德義心ニ基ク少カラズト云フヘシ語ニ云ク君子成ニ人之美、蓋此舉自ラ揚言スヘキ價値アルコトヲ信ス

嗚呼我親愛ナル會友諸君ヨ乞フ今日此祭典ヲ行ヒタルノ心ヲ永ク維持シテ決シテ之ヲ忘却スルコト勿レ又願クハ今マ先哲諸氏ノ靈前ニ於テ勉メテ醫風ヲ保持センコトヲ誓ヒ獨リ自ラ之ヲ實踐スルノミナ

ラス他ノ同僚ヲモ勸誘シテ共ニ此善良ノ途ニ進マンコトヲ

先哲祭ノ席上ニ於テ

杉 亭 二

一今日文運ノ隆盛空前ナルコトハ諸君モ御承知ノ通ナルガ此ハ偶然ニコノ盛況ニ達シタルニハアラズ
全ク先哲苦辛經營ノ餘澤ナルコト固ヨリ云フマデモナキ所ナリ殊ニ醫學ノ如キハ遠西ノ法ヲ採用シ
タルコト最モ舊ク先哲ノ丹精ニ因リテ或ハ書ヲ著シ或ハ之ヲ講シ或ハ實際ニ之ヲ診治ニ施シ百方苦
心シテ其基礎モ半ハ已ニ成リ居タル上ニ近世許多ノ學士出テ段々之ヲ修補シテ愈々進歩ノ方針ヲ
取り以テ今日ニ至リタルコトナレハ輸入金額ノ費ヘモ他ニ比シテ左ホト大ナラスシテ而カモ我國人
ノ命ヲ助ケタルコトハ至大ナルベシ

一ソレニツキ諸君ノ御心附コテ今日先哲ノ靈ヲ祭ラル、ハ至極結構ナルコト存ズルナリスベテ事物
ノ發達ニハ順序アリ其本ナクシテ今日ノ隆運ニ至ル能ハサルコト勿論ナレバ先哲ノ偉業ト効徳トヲ
追慕景仰シテ之ヲ祭ルコトハ吾人學孫タルモノ、當ニ勉ムベキ所トス

一私ハ孤ナリケレハ醫師タラント思ヒ又孟子ニ矢人豈不仁於函人哉トアルヲ見テ更ニ發憤シ醫範提

綱ヲ習讀シテ始メテ人身ノ構造ヲ知り其精妙ニ服シテ愈々蘭醫トナリ後ノ世ヲ營マントノ志ヲ立
タリ之ヲ他人ニ聽クモ此醫範提綱ノ當時後生ヲ開誘シタルノ効ハ莫大ナリシナリ私モコノ醫範提
綱ヲ讀ミテソレヨリ醫ニ志シ少シハ其學ヲ修メタレト中途ニシテ他ノ道ニ轉シ今ハ全ク其事ヲ忘
レタリサレドモ今日圖ラズモ先哲ノ祭典ニ列スルノ榮ヲ得タルニ依リ私ガ嘗テ見聞シタルコトヲ記
臆ノ儘ニ述ヘテ諸君ノ聰耳ヲ瀆サントス

一私カ幼稚ノ時ヨリカスカニ覺ヘ居リシハ彼ノ種痘ナリシ頃ハ文化ノ終カ天保ノ始メニ高島四郎太
夫(號秋帆)トテ長崎ノ町年寄ト云フ重役ノ人アリ此人ガ和蘭人ニ種痘ノコトヲ聞キ之ヲ得ント思ヒ
蘭人ニ頼ミシニ蘭人モ大ニ周旋シテ痘苗ヲ和蘭ヨリ取寄セシニ其苗印度ノ熱海ノダメカ變敗シテ
之ヲ種ユルニ善感セズ蘭人ノ申出ニハ子供ニ種痘シテ連レ來ラバ其功アルベシ左レハ乳母モ添ヘ
サレハ叶ハヌトアリケレト婦人ヲ連レ來ルハ國禁ナレハ如何トモスベカラズ蘭人モ殆ト當惑シケ
レドモ尙コレニ懲リズ種々工夫シテ漸クシテ其種ノ發生ヲ得テ直チニ種痘ヲ繼キテ江戸ニ傳ヘ夫
ヨリ諸國ニ種痘傳ハリタリ此一事ハ高島氏ノ談話ヲ直チニ聞キシナリ

一私カ壯時ノ頃ノ醫者ハ三枚形又ハ四枚形トイヘル駕籠ニ乘レリ此駕籠ノ形ハ立派ナルモノニテ陸
尺二三人多キハ四人シテ之ヲカツク其服裝骨節モ中々美麗ノモノナリ余モ始メ醫ニ志シ長スルニ

從ヒ志モ次第ニ增長シテコノ三枚形ヨリ四枚形ノ駕籠ニ乘リ大ニ世ニ鳴ラントセシガ今日夢トナ
リシモ可笑シ

一當時蘭學ニハ江戸ニ坪井宇田川杉田箕作ノ諸家アリ其内坪井先生ハ最モ名高クシテ門人モ多カリ
シナリ而シテ西洋ノ醫學ヲ修メシモノハ一旦長崎ニ行カテバ世間ノ用ヒ宜シカラズ幅ガキカズ長崎
ニ到リタレハトテ只遊ブノミ何モ醫學ノ修業ヲナシ得ルニアラズ盲人カ京都ニ登リテ何之一ノ名
ヲ得ルニ同ジ

一醫師ハ何時ノ代ヨリ始マリシカ總シテ剃髮セリ藝者役者ナド、并ヒ稱ノ之レテ長袖ト云フ上等ノ
醫者ハ御匙ト稱シ漢書ヲ習ヒ傷寒金匱其他漢土ノ醫書ヲ講究シテ詩文ナトチ善クセリ中等下等ハ
帶間同様ニテ酒筵ナトニ取持致シ婚姻ヲモ媒介スルニ至リ其風儀ハ段々惡クナリテ隨分聞クニ忍
ヒサルホドノヲモアリキ

一糸脈ト云フヲアリ至貴人ノ御脈ヲトルニ糸ニテトルヲニシテ名人ニアラザレバ爲シ能ハザル所ナ
リ

一蘭學漸ク開ケ蘭方醫學モ大ニ進ミテ伊東玄朴大槻俊齋ナドノ諸家顯ハレタルニ又一方ニハ多紀樂
真院辻元爲春院ナドノ漢方名家アリテ相嫉相惡ノ姿トナリシガ伊東氏ナドハ中々ノ才物ニテ評判

至テ宜シカリケレハ從テ漢方醫ノ嫉ヲモ受ケシナルベシ元來蘭學必スシモ惡シト云フニハアラズ
シテ蘭方醫ノ仕方ニモ或ハ宜シカラヌヲモアリ隨分色々ノ策畧モ行ハレタル様子ニテ爲ニ漢方醫
ヨリノ攻撃一層劇甚トナリシヤニ思ハル後ニ蘭醫禁制ノ令出デシモコレハ幕府醫官ヘノ令ニシテ
世間一般ト云フニハアラズ蘭方醫ハマス、其勢力ヲ世ニ逞スルニ至レリ

一醫者ノ玄關ト諺ニモ云フ通り醫者ノ業ヲ開クトキニハ其玄關ヲハ甚タ美麗トナセリ其様今ノ代言
人ノ門構ヘニヨク似タルモノアリ又藥籠ノ立派ナルヲ造リ捧ニテ之ヲカツグナド至テ形容ヲツト
メタルモノナリ又夜分人ヲ頼ミテ戸ヲ敲カシメ以テ病家ヨリ診ヲ求メシモノ、如クニ擬セシムル
ナド虚飾ノ形容ニ最モツトメタル様ナリ

一右ニ反シテ其病者ニ對スルノ様子ハ誠ニ上手ト云ハサルベカラズ病者ニ對シテ中々ソラサヌ所ナ
ドノ様子ハ形容スヘカラズ筆ニモ口ニモ盡サレヌホド巧妙ナリ私嘗テ水野土佐守ト云ヘル人ノ許
ニ在リテ蘭書ノ翻譯ナドセシヲアリシトキ私ハ土佐守ノ書齋丹鶴書院ニ居リタリ此書齋ハ二階ニ
テ私カ坐セル室ノ奥ニ一段高キ所アリ障子ヲ建テ、境トナシ其内ニ土佐守居ラレタリ或時奥ノ方
ヨリ一人來リテ何事カ土佐守ト談話スル様子ニテ其言語イカニモ沈重ニイカニモ懇切ニ且ツノ音
調イカニモ優美ナリケレハ不圖耳ヲ澄マシテ障子越シニ之ヲ聽キタルニ「御病氣ノ摸様ハ唯今左

シテ御心配ニ及ブホドモアラズシカシ何時變化ノ起ランモ斗リ難シタトヘハ南風ノトキニ品川
アタリヨリ火事ノ出テタルニ同シ或ハ萬一ノ飛火アランモ知ルベカラザルヲナレハ御手當豫防ヲ
專ニ仕ルベシト諄々懇諭イカニモ聽者ヲシテ能ク感動セシムルヲ恰モ菩薩ニデモ遇ヒタル心
地セラレテ此人ナラバ我一命ヲ托シテモ可ナリトノ感ヲ起サシメケレハ土佐守ハナルホドト
云ヒ居ラレタリ後ニテ聞ケハ此人コソ當時有名ノ伊東玄朴氏ナリシト云ヘリ其他ノ舉動ハ推シテ
知ルベクイカニモ人氣ヲ取ルヲ主トシタル有様ニテアリキ

一今時ノ醫者ノ病人ニ對スルノ様ヲ見聞スルニ或ハ疎畧ニ過ルノ感ナキニアラズ固ヨリ素人ニシテ
醫學上ノ事ヲ聞クモ寸益アラザレドモ病者ハ其答ヲ得テ大ニ安心スルモノナリ私ノ知人ニ病者ア
リ佐々木東洋氏ニ紹介シテ診ヲ乞ハシメシニ後ヲ數日ニシテ來リ語リテ曰ク佐々木氏ニ診ヲ乞ヒ
タルニ氏ハ他醫ノナス如ク打出ノ小鏡見タルヤウナモノニテ胸ヲ敲クヲモナサズ又護謨ノ管ヲ耳
ニ挿ミテ胸ヲ聽キモナサズ一寸胸ヲ見シノミナリシガソレニテ眞ニ病ヲ診定シ得ルモノナリヤト
左モ不服ラシキ口調ナリケレハ私ハ之ニ諭シテソハ君ノ病氣輕症ナルガ故ナルベシ佐々木氏ガ胸
ヲ聽キ胸ヲ敲キ注意細心シテ診スルホドノ病者ナラハ餘程大病ナルニ相異ナシマヅ安ん心アル
ベシト告ケ置キタリ、此病者ハ中等以上ノ知識アルモノナルガ尙斯ノ如シ、今ノ若キ御方ハ然ルベ

ク御工夫アリテ病者ヲ慰諭スルヨウニセラルベシ固ヨリ醫學上ヨリ言ヘバ病者ハスベテ愚物ナリ
ヨキヤウニ慰諭シテ安心セシムルヲモ亦醫術ノ方便ト云フベシ左レドモ決シテ漢方醫ノ風ヲ學ヒ
テ病者ノ機嫌ヲ取レヨト云フニハアラズ

一前ニモ申セシ通り幕末ニ方リテ漢蘭醫軋ノヲアリシガ斯ノ如キハ何レノ世ニモ免カレズ昨冬
衆議院ノ藥劑師ガ持出シタル醫藥分業論ノ如キハ古シノ漢蘭兩醫ノ争ヒニ似タリ衆議院モヨク々
々取調ベ醫藥兩立ノ規則並ニ世間下等ノ病人ノ風ナトヲ熟知セズ若シ分業スルヲモアラバ蟪蛄ノ
争漁夫ノ利トナルト云フ語ノ如ク賣藥者、人相見、家相見、祈禱、御札、御夢想、鬼子母神ノ水ノ初穂
等ガ藥劑師ノ肩ヲ持チテ藥劑師ハ何ノ利スルヲモナキニ至ラン殊ニ流行病ナドアリシキハ多數ノ
貧人ハ憫ムヘキ状態ニ陥リ爲ニ國ノ大害ヲ醸スノ恐レハナキヤコレ最モ注意スヘキナリ
一段々世ノ開クルニ從ヒ右様ノヲモ起リ醫術ノ俗世界ニ對スルヲモ煩雜トナリ又如何ナル害ヲ醸ス
ヤモ斗リ難シ故ニ醫學不案内ノ俗世界ニ對シテモ注目ヲ怠ルヲナク以テマス、醫學ヲ開カレン
ヲテ望ム

明治廿五年三月四日先哲祭紀事

祭場ハ都下ニテ幽閑ノ地ヲ選ミテ根岸ノ里ナル此花園ト定メ其裝飾ハナルベク質素ニシテ浮華ニ流レザルヤウ務メタリ

場ノ正面、床ノ間ニハ「先哲精英之所鐘」ヲ安置シ、傍ラニ諸先哲ノ像ヲ懸ケ、又ソノ後ニ高野長英先生カ自ラ寫サレタル孝經全文ノ幅（櫻井郁二郎氏藏）ヲ掛ケ、前ニ供フルニ清酒一樽（中外醫事新報社原田貞吉氏贈）ヲ以テセリ」少シ離レタル所ニ諸先哲ノ著譯書殊ニ其創始ニ係ルモノヲ陳列シ又別ニ參考書トシテ和漢ノ醫籍數十部ヲ陳列セリ

午后二時一同席ニ着クヤ藤根常吉氏先ツ開會ノ詞ヲナシ次テ吳秀三氏先哲ノ靈ヲ祭ルノ文ヲ朗讀シ次ニ富士川游、川上元次郎、高田耕安、村上庄太諸氏ノ演說アリ、最後ニ杉亭二氏ノ演說アリテ全ク其式ヲ終リ、尙餘興トシテ宮春氏ノ薩摩琵琶數曲アリ

右畢リテ一同ニ茶菓ヲ呈シ又折詰ヲ配リ靈前ニ供ヘタル神酒ヲ開キタレハ人々微醺ヲ帶ヒテ談話漸ク興ニ入り歡ヲ罄シテ相別レシハ午后七時過ル頃ナリキ

當日參同セシ人々ハ左ノ如シ

杉 亨二 關場 不二彦 高田 耕安 吳 秀三 多田 學三郎
 鶴田 禎次郎 赤沼 信古 三宅 速 平野 千代吉 村上 庄太
 御堂 義夫 塚原 寅次郎 石田 齊 高比良 養次郎 服部 悌吉
 田島 東一 皷 四郎 藤根 常吉 富士川 游
 土肥 慶藏 井上 通泰 高橋 金一郎 鈴木 徳男 寺田 織尾
 (以上五氏ハ豫テ參同ノ約アリシモ當日差岡アリテ出席セズ)
 東京醫事新誌局 醫事新聞社 中央醫事週報社 中外醫事新報社
 (以上特ニ本會ヨリ招待セシ者)

私立獎進醫會々員諸氏主唱トナリ茲ニ斯道ノ先哲在天ノ靈ヲ祭リテ斯道ノ振ハザルベカラサルヲ期
 セントシ、席上先哲苦辛ノ餘リニ成レル圖書ヲ陳列シテ其ノ下ニ團樂シ、大ニ昔日ノ醫風ヲ談シテ現
 時ニ及ビ、現時ノ醫弊ヲ論シテ將來ニ亘リ、彼我胸襟ヲ披キテ所懷ヲ戰ハシ、先哲ノ欽仰スベキヲ嘆
 賞シテ今醫ノ勤メサル可ラサルヲ慷慨シ、日没シテ尙ホ散スルヲ忘レ、酒一瓶肴一盤、絃歌聲曲ノ興
 ナクシテ坐客自ラ樂シム嗚呼此獎進醫會天下ノ醫師ニ率先シテ先哲祭ヲ起ス、苟クモ身ヲ醫籍ニ掲
 クル者宜ク獎進醫會ノ美譽ヲ贊同スベシ弊社當日招キテ辱フシテ盛況ヲ陪看スルヲ得タリ茲ニ蕪
 詞ヲ綴リテ同會ニ寄ス

醫事新聞社

田代義徳 敬白

近者、私立獎進醫會ノ諸子相議リテ先哲祭ヲ施行セラレタリト聞キテ、余以爲是レ近來ノ一大美事
 ナリト、蓋シ我道ノ今日アルハ固トニ先哲ノ餘澤ニ由ラズンバアラズ、吾人學孫タルモノ宜ク其靈ヲ祭
 リテ景仰ノ意ヲ表スベシ、而シテ未ダ日ヲ期シテ先哲祭ヲ行ヒタルノ事アルヲ聞カズ豈遺憾ナラズヤ、

嗚呼今此美舉アルニ遇フ、余將ニ雙手ヲ舉ケテ之ヲ賛セントス、其記事成リテ之ヲ有志ノ人々ニ配布セントスルコ方テ一言ヲ余ニ徵セラル、余既ニ此美舉ヲ賛セリ、何ゾ謫劣ヲモツテ其ノ請ヲ辭スベクンヤ、乃チ蕪辭ヲ記シテコレヲ贈ルト云爾、

中外醫事新報社

原 田 貞 吉

余輩ノ千百萬語敢テ先哲祭ヲシテ壯ナラシムルニ資セス、余輩設令一語ノ言フ無キモ先哲祭ノ壯ニ於テ歆クル處アルヲ無シ、何トナレハ先哲祭其モノ既ニ頗ル壯ナレハナリ、要スルニ余輩ノ喋々ト黙々トハ先哲祭ヲシテ輕重ナラシムルニ足ラサルナリ
然レハ余輩既ニ招カレテ其席末ヲ汚ス豈ニ一言ナクシテ可ナランヤ
先哲カ吾人ニ與ヘタル處ノ賜ハ赫耀トシテ天地ノ間ニ充チ吾人日夕服膺シテ未ダ一日モ忘ル、トラス、更ニ式ヲ設ケテ之ヲ祭ルノ必要無キカ如クナレハ世愈々下リ人益々澆季ニ赴カバ吾人ノ子孫或ハ先哲苦辛ノ蹟ヲ忘レ晏逸ニ流レ苟クモ愉ムノ徒出テサルヲ保セス、此ノ如キノ徒チ警ムルハ先哲カ經營慘怛ノ蹟ヲ想起セシムルヨリ善キハナシ、コレ先哲祭ノ無カル可カラサル所以ナリ

茲ヲ以テ余輩ハ世ニ先哲祭ノ舉アランヲ望ミタルヤ久シ前年大日本醫學會此舉アリ、少シク余輩ノ希望ヲシテ充タシメタリ、然レハ彼ハ唯一時ノコニシテ永續セシムルヲ能ハス、余輩ノ頗ル遺憾トスル處ナリシニ今ヤ私立獎進醫會、々主トナリ此盛典ヲ舉ケラル余輩豈ニ感謝セサルヲ得ンヤ
孔子ハ告朔餼羊スラモ之ヲ稱セリ、況ンヤ此盛典オヤ
世ノ尢然タル諸協會カ未ダコレニ着目セサルニ最爾タル獎進醫會カ卒先シテ此盛典ヲ舉グルニ至リタルハ余輩ノ最モ感謝スル處ナリ

中央醫事週報社

川 上 元 次 郎

先チ仰ギ遠チ慕フハ道ヲ學ブノ厚キ所、前チ祭リ祖チ祀ルハ道ヲ尊ブノ到レル所、此ノ仰慕ノ誠アリテ此祭祀ノ典ヲ舉グ、諸公在天ノ偉靈悦ンデ其ノ饗ヲ享ケザラン乎、惟フニ諸公ノ斯道ノ爲ニ基チ開キ業チ創ムル時勢共ニ不可ナリ、然シテ其刻苦勉勵孜孜已マザルモノハ豈ニ其ノ一身ノ聲利名譽ノ爲ナラン乎、其心既ニ聲利名譽ノ爲ナラズ、宜ナリ其ノ德澤後世ニ溢レテ今日我國杏林ノ鬱茂チ致セルヲチ、況ンヤ我國ノ文明之レヲ泰西ニ取ルモノ、如キ實ニ諸公ガ間接ノ指導誘掖ニ係ルモ

ノ少ナカラズトス、彼ノ戰陣ノ法工藝ノ學亦タ自カラ其ノ藥籠中ノ一物タリシノミ、古ヘニ謂フ良
醫ハ國チ醫スト、然ラハ則チ十九世紀ノ文華ニ伴ハレテ我カ帝國ノ光彩チ煥發スルモノ果シテ諸公
ノ賜モノニ非ラズト謂ハン乎、後進生 寬治 幸ニ今日ノ盛典ニ陪シテ諸公ノ影前ニ稽拜スルヲ得、敬
ンテ一瓣ノ香チ炷シテ恭シク微旨ヲ述ブ、其ノ平生斯道ノ爲ニ鞠盡スル精神ノ如キハ、載セテ我カ
東京醫事新誌ニアリ、在天ノ偉靈冀クハ垂鑒セヨ

明治廿五年三月四日

東京醫事新誌局

二 神 寬 治 再 拜

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name 神寬治 and the word 再拜）

明治二十五年五月廿四日印刷
明治二十五年五月廿五日出版

非賣品

編纂者兼發行者

富士川 游

東京日本橋區蠣壳町
二丁目十四番地

藥研堀活版所

木元由太郎

東京日本橋區藥研堀
町三十三番地

印刷者

民國二十五年五月廿五日出版

中華民國二十五年五月廿五日

大正...

非賣品

13

U



004675-000-6

特28-770

先哲祭

富士川 游/著

M25

ACE-1344



特2

7